

交叉点24

明高24回生通信

20th/Mar. / 2017

「柳先生の思い出」—随筆「航跡」より

武岡 徹

紺のうす地のワンピースに、胸に大きなブローチをつけた先生にはじめてお目にかかったのは、この年はじめて国立音楽大学に着任された先生を、入学したばかりの声楽科の学生六人がお迎えした時であった。

昭和二十九年の五月、あざやかな若葉の木立の下を、通って教室に向かわれた先生は、にこやかに私達に言葉をかけられた。

あれから三十年、レッスンで教わったこと、学校の帰り道に先生から伺った数々の話を思い出す。

その頃、私の下宿は井之頭線の代田二丁目にあっただので、駒場まで帰られる先生のお供ができる車中が、いつも大変楽しみであった。先生が話されると、どれもこれも生き生きと、まのあたりに見えるようで、特に明治・大将の情緒は、いつも私の心を深くとらえてしまうのであった。早春、四つ手網で白魚をとっていた頃の隅田川の情景、晩春から初夏にかけて、「きゅうりの一なえ、トマトの一なえ、へちまの一なえ、あさがおの一なえ」と、のどかな節回しで流して歩く苗売りやもの売りの話、うら道やぬけ道はみんな知っていたと、思い出してはいたずらっぽく懐かしんでおられた子供の頃の浅草や奥山の話、六つの頃から、毎日のように長唄のお稽古に通っておられたが、ある朝いつものようにお稽古にいくと、目をこすりこすり出てこられたお師匠さんが、「今日はお休みだよ」といわれたこと。

先生は、ペツォールド先生のことをよく話された。

昭和三年、ドイツに留学された先生は、ご自分の歌が本場でどの程度なのかを確かめに行かれたそう。向こうで開かれた独唱会は大変好評であった。「一体、この日本の歌い手は誰に習ったのだろう」と書かれた新聞評を見て、ペツォールド先生に何よりの恩返しができたと思って、大そううれしかったと話しておられた。

ベルリンでは、指導者のワインガルトナー、ピアノではラフマニノフ、声楽ではシュルスヌス、オネーギン、スレザークなどの演奏を聞かれ、ベルリンから一歩も出ず勉

強されたこと、特に、当時すでに全盛期をすぎたスレザークが、音程などには多少問題はあったが、聞く者の心に大きな感動をあたえたその演奏に、歌はこうでなくてはならないと強く思われたそうである。

日本に帰られた後、宗悦先生のおられるボストンに行かれたが、途中、海が荒れて、船客のほとんどが船酔いに悩まされたのに、先生は毎回食堂に出られたそうである。また先生は私が船や海軍に関心があることを知り、連合艦隊司令長官や軍令部長を務めた谷口尚真提督は、先生の義兄にあたり、先生の芸術にも理解があったと話されたのを覚えている。

何ごとにも興味がおありで学ぼうとしておられた先生は、義太夫の摂津大椽や歌舞伎役者尾上多賀之丞の名人芸に感心し、能楽師喜多六平太の巧みな呼吸に共感された。

先生の歌は、真に芸術家の歌であり、聴く人々に深い感動をあたえた。言葉に気品があり、香り、色彩、輝きに満ちていた。

気品と気迫と深い叡智とのうらに、下町育ちの江戸っ

子特有の粋、品のある色香、ユーモア、庶民のもつ大らかさが同時にあった。d

シューベルト「夜と夢」で、出だしの“Hell ge NAcht”と歌われるだけで聖らかな夜の香気が会場をつつみ、「春声」夜で



明石高等学校招待音楽会終了後
明石高校屋上にて(昭和37年)

は——狐も化ける春の夜ぞ——で、その巧みな言葉の

あつかいと先生の笑顔で、本当に化かされそうな、春の夜の雰囲気を見事に表現された。

日本ではじめて読書追う会なるものを開かれ、カルメンの「ハバナロ」は本邦初演。まさしく日本における西洋音楽の草分けの頃に歌いはずめられた先生が、大正から、昭和も戦前戦後にかけて、七十年以上も第一線で歌い続けてこられただけでなく、その音楽的な感覚や歌唱法は、シューマンハインクやスレザークの昔から、シュワルツコップ、フィッシャー・ディスカウ、アメリクと続く現在まで、常に世界の音楽の流れの先端をいくものであった。

昨年、大阪シンフォニーホールでシュワルツコップ女史の公開レッスンを拝聴したが、すばらしいそのレッスンも、私にとっては、常々先生に教えていただいたことに加えものなかつた。この世に生まれ、歌の道に進んだ私が、かけがえのないただ一人の先生にめぐり合い、歌の道ばかりでなく、あらゆるご指導を賜ったことは何にもかえがたく、心からの感謝を以てこの文を終わりたいと思う。

(昭和五十九年 雑誌「民藝」の依頼による)



柳兼子独唱会 芦屋ルナホール ピアノ武岡登士子(昭和50年)

「恥ずかしい話」

山口浩一郎(9組)

恥ずかしい話ですが、高校生の頃、自分はいずれ家族や明石というようなしがらみを捨て、世界を股にかけて飛び回るような仕事をするのだと思っていました。でも、あっという間に天狗の鼻をへし折られ、現実の壁にたたきのめされるのです(当たり前や)。そしてこの年齢になり気がつけば明石を一步も出たことがないどころか、こ

こ10年は自宅も職場も、生まれた場所から数キロと離れていない狭いエリアで暮らしているのです。皆さんの幅広い活躍をいつもこの同窓会誌で拝見して感心していますが、残念ながら私にはドラマチックな出来事は何一つ起こりません。熱烈な大恋愛、死にそうな病気、宝くじで大当たり、盗撮で新聞にのる……なんにもなし。結婚して子ができ孫ができ、母親と同居して毎日仕事という平凡を絵に描いたような小市民的な生活。墓も明石にあり、死んでも明石から離れません。

趣味はなし、と言いますか、明石駅近くの路地裏で安い酒を飲むのが唯一の趣味。さすがにこうなると冒頭の「しがらみを捨て」や「世界を股にかけて」というフレーズには自分でも赤面します。読んでいる皆さんはもっとあきれていると思いますが、若い時というのはそれくらい世間知らずだということにしておいてください。

なんの根拠もない自惚れが20歳を超えて打ちのめされた後、縁あって教職につき明石の中学校を転々とまわるのみ。あちこちに教え子やその保護者がいます。明石駅周辺で飲んでる時は用心。「このビール冷えてないぞ」などとちょっと語気を強めようものなら、奥からアルバイトの女の子が「ちゃんと冷蔵庫に入れてたよ、山口先生」。あっ！ばれとったんか。いっぺんに酔いがさめ小銭を置いてそそくさと店を出るのであります。

お決まりの家庭訪問は手慣れたもので、10分ほどマニュアル通りこなして帰りかけた時「覚えてる？山口君」と不意打ちをくらい、そこから高校時代の倫社の先生の話で30分盛り上がり、次が遅れて苦情が来ることもありました。なんせ生まれてからずっと明石にいたのだからこれも宿命。幼稚園のクラスメイトと偶然会い「山口君、幼稚園の時と全然変わらへんねえ」と言われ、よくおしっこを漏らしていた頃と一緒に情けないような複雑な笑みを浮かべておりました。

長く教師を続けていると、子どもと親の格闘につきあうことがあります。子どもは親の思うようには育たない。親の方がへとへとに疲れ果て力尽きた時、子どもが自分の力で巣立っていく姿を何度か見かけました。まあ人生すべてにおいて自分の思い通りにはいかないのが当たり前と自分自身を納得させています。

私の寄稿文でいっぺんにローカルな話題になってしまい申し訳ありませんが、これしか持ちネタがないので許してください。だから書くのいやだと断っていたのに……。今は、これまた縁があって神戸の女子高校に勤め

ています。現在63歳、あと20年生きて、少しぐらいの冒険と言いますか、妻にばれないようなアバンチュールを期待しますが、そんなスケベ心で人生を棒に振った諸先輩を見ておりますので、分相応、大きな事は望まず、小さなことからコツコツと…… おっと筆がすべりました。今後も平凡に暮らしていければと思っています。そのかわり、この紙面で皆様方の武勇伝を楽しませて頂きますのでよろしく願います。ああ恥ずかしかったです。

「校歌と私」

水池 亮一

くほのぼのと明けゆく空や雲のいろ
島山のかげは清し
わが学舎は海にのぞむ、
われらつねに世界にのぞむ
いまぞ集え、明石高等学校>

本当にいい歌ですね。

2016年4月30日の同窓会に出席し、久し振りに歌いました。

私は、明高卒業後、学生時代は西明石の実家で暮らしましたが就職すると東京勤務となり、その後、3回合計10年余モスクワで過ごしました。

校歌のく世界にのぞむを結果的には、実践したかも知れませんが、決してそのような願望、意欲を持っていた訳ではありません。

人生の節目、節目に希望した方向とは違う現実には遭い、それでも与えられた選択肢の中から、自分なりの判断で時を重ねてきました。

3回のモスクワ勤務の時期と状況は以下です。

一回目 1981年-1982年

1979年ソ連のアフガニスタン侵攻、1980年モスクワオリンピックの当時西側諸国の参加拒否。正に米ソ冷戦真最中でした。

二回目 1989年-1992年

ゴルバチョフがソ連共産党書記長になり、ペレストロイカと言われる大改革を行いました。ソ連経済危機が発生し1991年にはソ連邦が崩壊しました。

三回目 1998年-2002年

エリツイン時代末期のロシア経済危機からプーチン時

代が始まりました。

最後の駐在から既に14年経過しており、私のロシア感には少々旧いとは思いますが、海外に居たことにより、日本を外から見ることが出来ました。

日本の優れていることは本当に沢山ありますが、今回は、ソ連、ロシアのほうが良いのではと印象に残っていることを二つ述べたいと思います。

一つ目：ソ連時代、地下鉄内で混雑している時、極自然にどこの駅で降りるのか？自分は次の駅で降りるという会話が生まれていました。これにより人々は、停車前に立ち位置を入れ替わり、シンドイ状況ながらも少しは暖かい雰囲気になっていました。

私は、今でも東京の痛勤ラッシュに遭遇しています。どんなに混雑していてもお互いに声を掛け合うことはなく無言でしかも半数以上はiPhoneとにらめっこという状況です。

本題とはそれですが、毎朝新宿駅で乗り換えています。あるデータによるとラッシュ時60万人が同駅で移動しているとのこと。

明石市の人口の2倍の人々が一つのターミナルに集中していることとなります。

二つ目：1991年ソ連からロシアへのなし崩し的な移行時代、一般の人々の生活は苦しかったと思います。私は、家族4人でモスクワにて暮らしていました。

秋晴れの休日、モスクワの動物園で過ごし、出口から、駐車場に向かっていました。

3歳になる息子が手にしていた風船を離し、空高く飛んでいってしまいました。泣きだした息子を見て、道端で手編みの籠を売っていた顔色の優れない初老の男性が駆け寄り、手編みの籠を息子に渡しました。

息子は、泣き止み大喜びでした。

私は、ありがとうございます、籠は買いますので幾らですか？と尋ねました。初老の男性は、笑顔でとんでもない、籠は自分がプレゼントしたもので、お金を貰う訳にはいかないと穏やかに主張し、彼の身の上話を始めました。ベトナムの石炭炭鉱現場で働いていたが、肺を患い、モスクワ近郊の療養所に入っている。友人から余った竹を貰い、気分の良い時に編んで、天気が良ければ気分転換の為、売りに来ている。この籠で喜んで貰えて本当に嬉しいと。

私は、彼の好意に感謝し、有り難く籠を受け取ることにしました。最後に握手した際の手の大きさ、暖かさが今でも忘れられません。

ソ連、ロシアの良いところについては、いつか一献を傾ける機会があるときにご紹介したいと思います。

日本とソ連、ロシアは近くて分かりにくい隣人というイメージをお持ちの方が多いのではないのでしょうか。人種、宗教、主義、体制、言語の違いは当然として領土問題も影響しているのかも知れません。

1855年 日露通商条約

1904年 日露戦争

1945年 ヤルタ秘密協定(米国、英国、ソ連)

1945年 8月8日ソ連による宣戦布告(満州、朝鮮北部、南サハリン、千島列島占拠)

(その後、約60万人の軍人、民間人がソ連に抑留されました。私の亡き父もその一人でした。)

1951年 サンフランシスコ講和条約(ソ連調印せず)

1956年 日ソ共同宣言

その後、様々な交渉がなされてきましたが、進展しているのでしょうか。

本年12月にプーチンが来日し、山口にて首脳会談実施という日程が発表されており、何か動きが？と期待されていますが、本当にどうなるのでしょうか？

この文集が発表されるときには、会談の結果は判明しているでしょう。

最後になりましたが、寄稿の機会を与えて頂いた方々に感謝し、皆様の更なるご健勝を祈りつつ、今回は筆を置きたいと思います。

2016年10月23日 寄稿

「近況報告」

卯月 準二(10組)

もう、63歳、いやまだ63歳……。

取りあえず、高齢者の域にまた一歩近づきました。

今年に入って、日本老年学会が高齢者の定義を75歳以上にしようという提言がありましたが、確かに日本人の平均寿命が男性が約81歳、女性が87歳では65歳

はまだ高齢とは言えないかもしれませんね。ただ、これを持って年金支給年齢をさらに引き上げる議論にならないよう気を付けなければなりません。私ごとですが、60歳を赴任先の台湾で迎え、その後会社の東京本社でしばらく勤めたあとサラリーマン生活に別れを告げました。そして、38年ぶりに明石の実家に帰ってきました。

大阪の茨木市に家を建てましたが、子ども達は独立し東京など違う場所で生活しており、誰も茨木の家に住もうとしません。

また、実家は明治の中頃くらいに建てられた家で、明石市の都市景観形成重要建物に指定されていたり、周りの親戚の本家筋にもあたり、おいそれと処分できないため、実家に舞い戻ってきた次第です。明石のキャラクター「時のわらし」が生まれてきたのは、実家にあった掛け時計がモデルになっているとのこと。



本当に古い家で、子どもの頃、友達を家に招待するのが恥ずかしくて出来なかった記憶があります。実家の造りは、木造厨子二階建て平入(屋根の正面側に玄関がある造り)で、1階が腰板張り、二階が漆喰塗りです('95年の震災で外側の漆喰ははがれ今はモルタル)厨子二階とは高さの低い二階建ての事で、「殿様の顔を見下ろしてはいけない」ということから、二階には部屋がないような工夫がされています。住むに当たり、その二階を整理していましたが、出るわ出るわ、要らない物が、、、、。

私や兄弟の小さいころの衣類や本はもちろん、亡くなった両親の衣類、さらに古い長持ちに入った昔の布団や衣類、明治生まれの祖父やその兄弟の本や教科書なども、また、昔、漁師だった関係で古い網なども。残念

ながら金目のものは皆無でした。　その中で、祖父の兄弟でやや年の離れた大叔母が書いた文章録が出てきました。調べると、この大叔母は明治31年の生まれで、19歳で早世した人でした。亡くなって今年でちょうど100年その文章録には、彼女が思いついたことを書いているのですが、ノート表紙の名前はなんと、英語で記載。おそらく尋常小学校を出た12歳から高等女学校の16歳の間に書かれたものと思われますが、ちゃんと英語教育がなされていたようですね。(明治維新後、英語が義務教育の中に一時期取り入れられており、明治の人が英語を書いているのも驚くことではないようです)

その文章録の中で、「読書の楽」という文章がありました。

その文章を一部紹介しますと、『人の楽は千差万別である。春に花を楽しむ人もあろう、秋の錦を愛する人もあろう、旅行を好むもの、歌音楽を楽しむものなど数え切れなくらいだが、その中でいくら楽しんで飽きないで楽しめば楽しむほど、益々興味が深くなってきて、しかも最も利益の多いものは読書の楽であろう。身体も心も溶けるばかりの夏の日でも、涼しむ青葉の影に座をしてみ、偉人傑士の伝記を読むと心も自ら奮起するであろう、冷たい風もようよう身にしんで月の冴えわたるころ、ひとり机に向こうて、聖人君子の教を学んだならば、よこしまな心も自然に消えふせ身も心も正しゅうなる様に感ずるであろう。数千年の昔を目の前に見ることもできる。正成と語り、秀吉と談ずることもできる。支那に入って忽必烈(=ケビライ　ハーン)を叱り飛ばし、セントヘレナに入ってナポレオンを慰め、アメリカに渡って、リンコルン(Lincoln=リンカーン)を励ますも心のままである。さては、居ながら台湾や北海道を一目に見渡すはおろか、ヒマラヤの山の絶頂に登り、スエズの運河をまたがり、パリーの華麗に驚き、ロンドンの雑踏に肝をつぶし、ナイアガラの響きに耳を覆い、サンフランシスコの大震災(=1906年4月発生)に同情の涙を注ぐもまた一脚の机の上である。……(中略)

貝原益軒先生が、「読書を好むものは天下の至楽を得たるなり」と言われたのは至極最もな事である。』

これを書かれた時の大叔母の初々しい思いが新鮮に感じられる。行ったこともないであろうにパリーの華麗さやロンドンの雑踏や、ナイアガラの響きなどはどうしてしたのであろう。(明治の積極的な欧米化の推進の表れか)

大叔母がどうして早く亡くなられたのかは知らないが残念なことである。私も読書好きであるが、今はただただらだと身にも付かない読書をしている。　これを機会に、貝原益軒の「養生訓」でもよんでみようかと思いました。

ところで、今私は明石市産業振興財団というところで働いています。退職後は、上に書いたように、しばらく実家の片づけ以外何もしていませんでした。老後は自分のしたいことをとって思っていました、考えてみるとこれといって趣味もなし。

の近くで育ったため水泳はまあ得意。それと、タイと台湾に赴任していた頃はプールのあるアパートで暮らしていた関係で、休みの日は水泳はよくしていました。

そうだ、水泳だ、水泳をしよう。腰痛、膝痛のリハビリにもいいと思い、実家に近いスポーツクラブ

に行ってみました。しかし、驚いたことに私より年齢の高い老人の方ばかり・・・。

少しは期待した若いおねーさんはおらず、本当に70歳以上の老人の方ばかりでした。　私も若くはないが、まだちょっと年齢が離れており、それで入会せずすごすごと帰ってきた次第。

この後、内館牧子の「終わった人」(=定年後の物語)という本を読みましたが、定年を迎えた主人公がスポーツジムに通いますが、同じようにジムは老人ばかりとの記述がありました。皆さん長生きされるはず。ランの栽培に夢中な女房は、私には関心がなく家にいると粗大ごみ扱いだし、それで、居場所がなくなって、じっとしてはボケるばかりと思い、また働くことにしました。

貝原益軒も養生訓のなかで、『いつも働いている人よりも、何もせずに暮らしている人のほうが、健康によくない。流木は腐らないし、いつも動いている扉の蝶番は長持ちする。それゆえに　人はいつも働いているほうが良いといえる。これも養生のひとつである。』と書いています。

企業支援係で、明石市の中小企業さんを中心に訪問し、財団主催のセミナー紹介や企業課題や　問題点をお聞きし、それに対してサポートをしています。

明石にも小さくても頑張っておられる企業さんがたくさんあります。すこしでもお役にたてればと思って働いています。

経営でお悩みの方、起業しようと思っておられる方は、

相談にのりますよ。明石に帰ってきてから、しばらくして松田君が開いた会で、40 数年ぶりに中学の同窓と会いました。

すっかり変わっており(自分も含め)、顔だけでは誰だかわかりませんでした。話をすると、「あー、お前か」と、一挙に中学や高校の頃に戻ります。

故郷はそこがいいですね。若返ります。皆様これからもよろしく願います。

事務局より連絡

住所不明者についてのお願い

住所が不明となっている方々の情報提供をお願い致します。

2017年5月現在で下記の方が不明となっております。

1組 坂本隆彦 村瀬繁樹 八木義孝 泉谷恵子 松尾洋子 2組 安藤悦郎 竹村郁子 長谷香代子 3組 北田雅福 高橋英樹 高見訓司 土島日出彦 増子隆 藤永みどり 秋定和子 平野由美子 鈴木佳子 4組 奥野好隆 田村政一 仲井 透 大泉尚子 山口哉子 5組 大村直樹 佐藤市朗 長谷川俊広 山本和彦 魚住篤子 坂本嘉代子 中川ゆかり 平山登志子 松末純子(6組?) 6組 馬場滋夫 西馬慎三 加藤明江 倉橋正子 米谷嘉子 7組 足立真知子 近藤恵子 坂本京子 佐藤美智子 富岡るみ 森江真岐子 盛井雅子 8組 諸岡宗司 山崎清孝 庄司真弓 田中英子 9組 魚住一裕 魚谷雅弘 加藤和宏 三浪晴生 安井潤 10組 木下孝一 黒田幸雄 西森正二 久山哲広 藤田嘉治 安尾弘文 山崎栄造

心当たりの方がおられましたら、下記連絡先までご連絡くださると助かります。

*名簿の管理は、手作業で行っております。ミスはご連絡ください。特に今回PCTトラブルがあり不安です。

《連絡先》事務局 河合昭彦

〒674-0051 明石市大久保町大窪1000-1

Tel 090-8659-5628 Fax 078-934-1667

メール kawai@dokikai.net

注)河合に連絡いただいた住所はサラトに連絡しますが、サラトに連絡された住所は河合には届きません。

・24回生のSNSのご案内

明高24回生のSNSを立ち上げております。

<http://sns.prtls.jp/meiko24/home.html>

このURLを開いていただき、「新規登録」をクリックいただくと「ユーザ登録」画面が出ます。こちらで登録いただきますとご参加いただけます。

・メールアドレスをお知らせください

携帯、PCを問いません。

頂戴したメールアドレスは、同期会の連絡用に使用させていただきます。下記のアドレスにメールを送っていただければ登録させていただきます。

携帯の機種変更、転退職、転居等でメールアドレスを変更された方もよろしく願います。

m24@dokikai.net



* QR コードです。携帯でのご連絡にご利用下さい。(機種によっては使えません)

* 携帯・スマホをご利用の方 meiko24@dokikai.net からのメールを受信可能にして頂けると同期会のメルマガが受信できます。

編集後記

皆様、原稿は常に募集中です。

引越された、転勤された、お孫様の話題等々、なんでも結構です。

通常の段取りとしては、毎年、11月一杯を目途に集めた原稿を中村(守)がデザイン、その後印刷、4月にサラトさんに渡します。

2月中くらいまでに、メールもしくは郵送にて原稿をいただければ掲載できます。